

EQ カーブ対応トーンコントロールの調整(12)(HP 収載)

—Marantz7 による調整(1)—

1. 始めに

前報(1)の方針を受け、前報(11)までに、Leak Point 1 のトーンコントロールの調整を検討してきましたが、今回は、S 氏と ST 氏のご協力の下に、お借りしてきた Marantz7 によるトーンコントロールの調整を試みます。

2. トーンコントロールの調整方法

まず、最初に接続は Marantz7 を介在しない条件として ZANDEN Model 120 の RIAA 以外の本来のイコライザーカーブで聴いておきます。

ついで接続を下記のように Marantz7 を介在させます。

LINN LP-12→ZANDEN Model 120→Marantz7(ライン入力)

→Brooklyn DAC+(ライン入力)→TruPhase→300B シングル

手順としては、Marantz7 のトーンコントロールをフラットにして ZANDEN Model 120 の RIAA 以外の本来のイコライザーカーブで聴いておき、ついで RIAA で再生して本来のイコライザーカーブの音に近づけるようマランツ 7 のトーンコントロールを調整します、また、必要に応じて Brooklyn DAC+ で位相反転を行います。

さらに、次のように ThorensTD124 から Marantz7 にフォノ入力します。

ThorensTD124→My Sonic STAGE 1030→Marantz7(フォノ入力)

→Brooklyn DAC+(ライン入力)→TruPhase→300B シングル

手順としては、本来のイコライザーカーブの音に近づけるよう Marantz7 のトーンコントロールを調整して、上記の調整結果と比較します。また、必要に応じて Brooklyn DAC+ で位相反転します。

なお、ZANDEN Model 120 と ThorensTD124 には仮想アース Crystal E-G を接続し、Marantz7、My Sonic STAGE 1030、Brooklyn DAC+ には仮想アース Crystal E を接続します。ZANDEN Model 120 と Marantz7 と Brooklyn DAC+ の接続にはアースアキュライザーを使用しています。

その他、今回、OPT ISO BOX を加えたことから、配信音源の再生により、その効果も確認します。

STAGE+配信音源の試聴

Spotify 配信音源の試聴



3. トーンコントロールの調整結果

まずは、五つのイコライザーカーブに相当する盤の選定から始めましたが、ジャケット情報やその他の資料の信頼性の問題から選定に時間を要しました。

盤の選定が終わったところで、最初に RIAA カーブのヒラリー・ハーンのイザイの無伴奏ヴァイオリンソナタのグラモフォン盤で手順通りに進め、この場合、トーンコントロールはフラットのまま試聴していきましたが、ZANDEN の最新録音の研ぎ澄まされたようなリアルな音から、Marantz7 がラインに挿入されると、響きの豊かな柔らかい音になり、ThorensTD124 からのフォノ入力にすると、いかにも真空管のフォノステージらしい、まろやかな音になります。

以後、DECCA カーブのショルティ指揮ロンドンシンフォニーのマーラーの交響曲 1 番の LONDON 盤、TELDEC カーブのムターとムーティ指揮フィルハーモニアのモーツアルトのヴァイオリン協奏曲 2 番の EMI 盤（註：EMI 盤の UK 盤は EMI カーブ、DMM 盤は TELDEC カーブという資料があり、TELDEC カーブに設定）、Columbia カーブのホロヴィッツのショパンのバラード 1 番の Columbia 盤、EMI カーブのジュリーニ指揮シカゴ交響楽団のマーラーの交響曲 1 番の EMI 盤などをテストサンプル盤とし、ZANDEN Model 120 の設定を RIAA カーブにして、Marantz7 がラインに挿入された場合のトーンコントロールの調整を、S 氏と ST 氏にお任せしました。その結果、トーンコントロールの上げ下げを少し触っただけで、元のカーブの印象に近づくことが確認できました。このあたりの調整はイコライザー特性に応じて、聴取側の感性で微調整することがポイントです。なお、位相に関しては ZANDEN Model 120 もしくは Brooklyn DAC+ で必要に応じて位相反転を行っています。

さらに ThorensTD124 からのフォノ入力でも、ライン入力におけるトーンコントロールの調整結果が、そのまま活かされました。

なお、Marantz7 には RIAA 以外に Columbia カーブの選択もできますので、Columbia カーブの盤では、Columbia カーブに設定すると、トーンコントロールの調整は不要でした。

音質の変化の傾向は、RIAA 以外でも、上記の RIAA の場合と同様の変化を辿り、**Marantz7** のラインアンプやフォノステージの真空管らしい個性が乗ってきます。以上から、トーンコントロールの調整は、盤のイコライザー特性の他、アンプの能力や試聴環境の音響特性も考慮しつつ微調整を行えば、多種のイコライザーカーブに対応していなくても一定程度カバーでき、特に **Marantz7** のような優秀なフォノステージを有する場合は、その魅力をより有効に活かすことができることが分ります。なお、上記の **Marantz7** のパフォーマンスには、アースアキュライザーによる仮想アースの接続も貢献しているものと思われます。

STAGE+のクラシックの配信音源の試聴については、ポリニーのベートーヴェンのピアノソナタ 32 番、ワイゼンベルグとカラヤン指揮ベルリンフィルのチャイコフスキーのピアノ協奏曲、ゲオルグショルティアアカデミアガラコンサートのアンコール曲の椿姫の乾杯の歌のソプラノ、アルト、テノール、バリトンの 4 重唱などを聴いていただきましたが、アナログ一筋の S 氏にも配信音源の音質に納得していただきました。Spotify のクラシック以外にジャンルの配信音源の試聴については、ご自身も Spotify 試聴をされておられる ST 氏に光アイソレーションの効果を認めていただきました。

4. まとめ

イコライザーカーブが RIAA でない盤を RIAA で再生した場合の違和感を、**Marantz7** のトーンコントロールを調整することで、かなりの程度カバーすることができ、**Marantz7** 本来の音質にも助けられて、新たな魅力を発揮させることができました。

以上